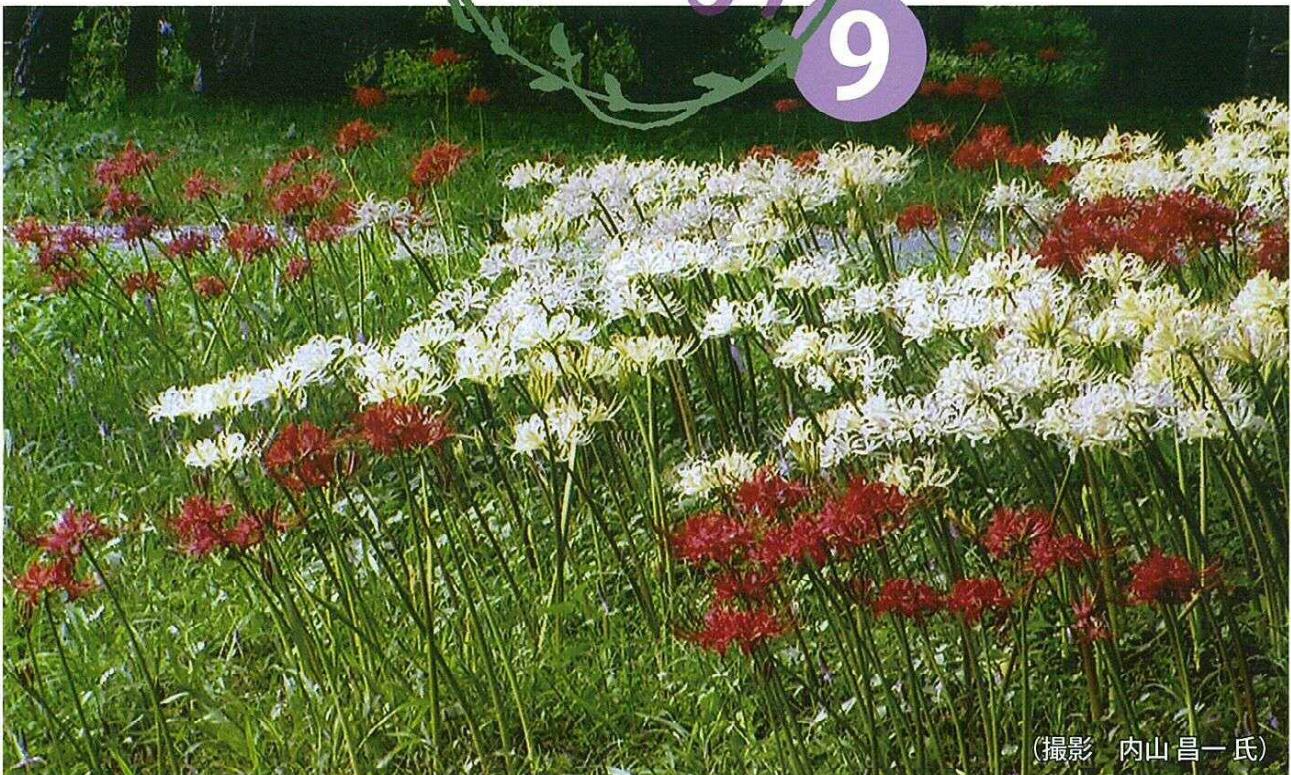


南無阿弥陀仏は
私のいのち



〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobiiryo.jp/>
発行人 岸本秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



(撮影 内山昌一氏)

お酒の飲めない私が、ある酒の席で焼酎の水割りを作つてゐる。ある人から「無理に飲まなくていい。役割があればそれでいいんだ」と言われた。正直この言葉に納得しているかというと、そうとは言えない。しかし、何か存在を肯定する力強さを感じた。今も私が、お酒の席に参加するのは、この言葉が少なからず影響しているのであろう。

今までの自分を思い返してみると、お酒の席に

限らず、様々な場面で役割を与えられていたことが判る。学校であつたり、職場であつたり。自分からすんで引き受ける場合もあれば、無理矢理押しつけられることがある。

すすんで役を引き受けるのは理解できるが、なぜ納得できないのに役割を与えられるのか。理不尽とも思う。

しかし、私たちが生まれてから死ぬまでも同じではないだろうか。決して自分で納得して生まれてきたわけではなく、納得して死んでいける人生ではない。

もともと私たちは、死にたくないと思っても、必ず死をむかえるような、自分の思いと身体が矛盾している身を生きている。その身がこの現実を生きるとき、生かされているという力強さを、私はこの人の言葉に感じたのかもしれない。

みやもとまさのり
宮本 昌周さん

今回は小平市で臨床工学技士をされている宮本昌周さんにお話を伺います。

●臨床工学技士とは

主に私はベースメーカー（心臓の脈を整える機械）の植込みから立ち会い、その後の設定や操作をしています。患者さんが退院された後も定期的に機械のチェックを受けに来ていただき、自立した生活を送れるようにお手伝いするのが私の主な仕事です。病院によって考え方は違いますが、私がいる病院では機械を埋め込んだとのケアを大事にしています。

●その人に合ったケア

この人はハイキングがしたい、あの人は犬の散歩がしたいとか、人によって生活水準は違っていて、それに合わせて脈が増えた方がいい人もいれば、安定した方がいい人もいます。患者さんが望むことをするには負担をかけなきゃいけないこともあります。どうしたらいいのかと一生懸命考えて設定しています。

ましてや、ベースメーカーは体

の中に機械を埋め込むわけですか、心のケアも大切になってしまいます。患者さんがやつてきたら「調子はどうですか」と聞いて不安や要望を聞くように心がけています。

●みんなで見る

医療はドクターだけでは成り立たなくて、看護師や検査をする人、レントゲンを撮る人、我々のような生命維持管理装置を扱う者もなければいけません。誰が欠けても、いい加減な態度でも駄目なんですね。だから、私に出来ることをやらなければいけません。誰が欠けても、患者さんとの会話や勉強も必要になります。全く同じ意味を持つているわけではありませんが、人間が悩み苦しむことはならないわけで、そうするになってしまいます。

このようないろんな患者さんを見るのをチーム医療と呼んでいます。それは病院内に留まらず周りの病院とも関わることであり、技士同士での勉強会もしています。勉強会といつても、実際には知識を身につけることより悩みを分かち合う方が大きいですね。「あの人人が頑張っているから負けられない」という気持ちで患者さんに接していくたいと思います。

（聞き手 高橋淳）

なん¹⁰で？ 「永代」

皆さん「永代」という言葉を耳にされたことはあるでしょうか。

永代と辞書で調べますと、「ながい年月、永世」とあります。真宗の教えの中に直接永代とは出てきませんが、その内容を意味する言葉として、無量寿・五劫等、色々な表現で出てきます。全く同じ意味を持っているわけではありませんが、人間が悩み苦しみ生きてきた歴史全体をあらわす言葉として教えて頂いているわけです。

その背景には、私達がたまたま頂戴した「ごのち」の尊さを、ときには見失い、あたかも自分の「物」のようにしている現実があるからです。連綿たるいのちの営みの中に、今私は賜ったのちが光り輝いています。そのことが経典では、無量寿とか、五劫と示されてくるのではないか。

ところで「永代」という言葉は、「永代供養」、「永代経」、「永代墓」というように用いられていますが、どういったことなのか、考えていただきたいと思います。

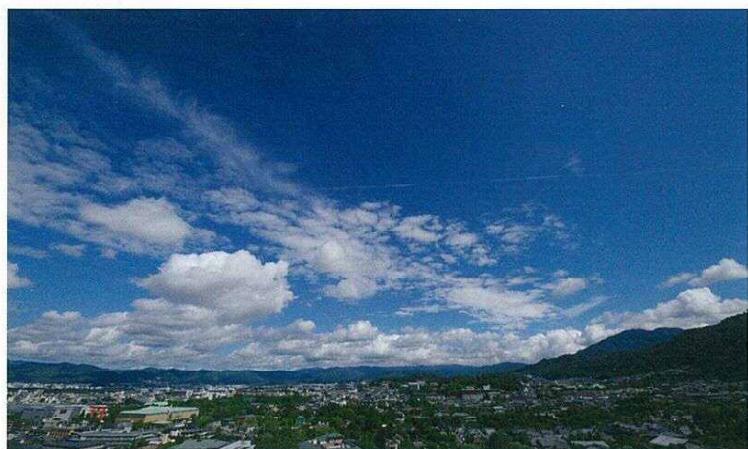
（大橋伊知郎記）

「名前は、生まれた時に、つけてもらえた、一番大事なもの。それは、いのちの発表なのだ」といった十歳の子がいます。名は、いのちの発表であるとともに、その名にかけられた願いを生きることであります。

名号は、阿弥陀仏という四字の名でなく、南無阿弥陀仏すなわち阿弥陀仏に南無(帰命)するという六字のみ名です。そしてその名号に本願をつけて「本願の名号」いうのは、人間の生活と悩みを知り抜いた法藏菩薩(ほうぞうぼさつ)が、思い通りになることが幸せだと思い込む迷走に切り込んで、根っこから解放しようと願い選ばれた名号りが、南無阿弥陀仏であるからです。だから、南無阿弥陀仏の名号は、本願の呼びかけであるとともに、その呼びかけに対する応答ですから、願掛けの言葉や呪文にはなりません。

しかし、名にそうした人間変革の力があることは、すぐにはわかりません。それで、阿弥陀仏は、本願名号の意義が世界中の仏たちに讃えられ、称えられるようになるまでは、覺りませんでした。阿弥陀仏が、諸々の仏たちにほめられようと誓うのは、仏の名誉のためではありません

ん。どこでも、名に執われ、自分の価値観でしか人やものを見ていない私たちの誤りを、いつでも、どこでも、だれにでも即座に思い知らせて、明るく正しい生活を歩ませるためにも、正しい生活を歩ませるためであるく正しい生活を歩ませるためであ



しょうしんげ 正信偈の話⑬

松井憲一

ほんがんみょうごうしょうじょうごう 本願名号正定業

(本願(ほんがん)の名号(みょうごう)は正定(しょうじょう)の業(ごう)なり。)

遇えたからのです。

口から、南無阿弥陀仏と出るのは、私が出すではありません。親鸞聖人はもとより、先生や先輩、祖父母、両親、友人、知人が諸仏となつて、南無阿弥陀仏をよろこばれるご縁に出

ところが、称名として、南無阿弥陀仏と称えると、称えることに力が入ります。私の称えに力みが入れば、一念が多念か大声か小声かなどと發音にとらわれ、いつのまにか仏の願いを忘れ、「名に願い込めたとおりにならない子」というような自分になってしまいます。その臨界をこえることは、称える私の側からはできません。

阿弥陀仏は、無数の仏どつながつて、現に私を育てて、善し悪しをこえた世界を願えとおすすめくださつていたのです。

そのおすすめが響くので、本願の名号が、正定業になるのです。正定の業とは、往生が定まる行為で、どのような状況でも引き受けて生きていくれる淨土を願う行いです。親鸞聖人は、南無阿弥陀仏と称えるはたらきを「しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。」とい

ります。

こうして、すべての人を見捨てない阿弥陀仏の大悲の心が、諸仏を動かしてまで呼びかけてくださったのが、南無阿弥陀仏です。だから、私の

正業はすなわちこれ念佛なり。念佛はすなわちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなわちこれ正念佛なりと、知るべしと。(『教行信証』行卷)といわれます。

私はいつでもその名を聞く位であつて、その分限の切り結びが、南無阿弥陀仏です。だから、南無と頭の下がることも「本願招喚の勅命(行卷)」であり、「南無阿弥陀仏は、生ける言葉の法身なり(曾我量深)」といただくのです。

山門の言葉

じょうもつ 常没の凡愚
ぼんぐ るてん 流転の群生



親鸞聖人が歩まれた南無阿弥陀仏の道は、称名念佛の歴史をもつて先立つて阿弥陀仏の本願に帰命し、本願の喚びかけに応えて生きて行かれた、よき人の人生によつてあらわされている。

具体的には七高僧に代表されるが、その生涯に触ると、どうしても徳の高い聖人というイメージを描いてしまう。学問に勝れ、自己管理も怠らないような、いわゆるエリートとしての存在である。確かに偉大な功績を世に残したことは周知のことであり、残された著作は多くの人々を導き、学者としてもすば抜けた才能を兼ね備えている。しかし、親鸞聖人が諸仏として仰いだ理由は他にある。

『教行信証』(信巻)

(木村 専正 記)

「常没の凡愚・流転の群生」と示され、絶えず煩惱に振り回され、現実に責任を負えない人間存在があらわされている。



それは七高僧が阿弥陀仏の本願によって目覚めた内容であり、凡愚の身に開かれている念佛をいたしかれた親鸞聖人のお言葉である。

凡愚の身とは特定の人を指すのではなく、あらゆる人間存在の根源的な姿である。一見、私とは関係のない話のようだが、自分の分別で答えを出し、いつも自分の判断が正しいつもりで生きている私が言い当てられている。そして、尺度の違う者が互いに傷つけ合い、争う、それが人間の世界である。

念佛の信心とは私の信念を磨いていくのではなく、いのちは私の思い(つもり)通りにならないという事実に目を覺ますことである。すなわち流転の身に目覚め、絶えず凡愚の身に帰り、生きていかれた歩みこそが七高僧の伝統である。

枕経は、阿弥陀如来(ご本尊)に向かって勤めさせていただくものであります。「き人をご縁として残された者が生死無常のことわりに深く領き、我がいのちをたずねる仏縁としていただくのが枕経なのです。

(木村 専正 記)

葬儀あれこれ

5

死にゆく人が不安にならぬ様に、案内として枕元であげるお経を枕経(りとうきょうじょきょう)と呼んできました。最近は病院で亡くなる場合が多く、自宅や葬祭場に搬送されてから行うようになってきました。

一般に枕経とは、亡くなった人への供養と思われがちですが、お釈迦様の經典に死者を弔う内容のものはありません。すべて苦悩する衆生のために説かれています。ですから、お経には生きている人が、生きている間に聞かねばならない大切な教えが記されているのです。

お墓のはなし「納骨」

納骨の日時はご遺族が多少とも落ち着きを取り戻す四十九日(満中陰)の前後が多いようです。ご葬儀の際に施主にお渡しする忌日表の「七七日」がその日に当たります。

お墓をお持ちでない方も、お墓を求めるまでは本堂でお預かりすることも出来ます。

また、最近では跡取りがないなどの理由から、永代納骨所への納骨を希望される方も増えています。こちらは永代に亘って西徳寺がお護りしています。

西徳寺には本堂裏の外墓地の他に、本堂の下の室内墓地、また第二会館には蓮華堂といつお仏壇形式の墓地等があります。永代使用料は場所によって異なりますが一五〇万円からで、その他、墓石代となります。ただ、蓮華堂は墓石代が不要であり、また即日ご使用いただけます。年間管理料はいずれも一五〇〇〇円となっております。

西徳寺内墓地の納骨については西徳寺法務員である華香所担当の菊池と神山が行います。

墓地のご希望、また御相談等がございましたらお気軽にご連絡下さい。
(山崎哲記)

えこお志お礼

千葉市	川島 弘 様
草加市	高柳 幸市郎 様
練馬区	富田 サワ 様
足立区	松宮 成直 様
習志野市	初田 節 様
浦安市	窪澤 仁 様

日誌

7月 21 日	混声合唱団「エコー」練習
7月 24 日	仏教青年会「歎異抄」に聞く 講師 宗 正元師
7月 24 日～26 日	真宗教団連合中央研修会 (高橋 参加)
7月 27 日・28 日	宗祖忌
7月 28 日	混声合唱団「エコー」練習
8月 4 日	混声合唱団「エコー」練習
8月 7 日・8 日	中興忌
8月 13 日～16 日	盂蘭盆会

混声合唱団「エコー」 新規団員募集



練習	月2回程度 土曜日 15:30～17:30
会場	西徳寺 本堂
会費	月額 1,000 円
曲目	(練習中の曲) 仏教聖歌集、「里の秋」「故郷」など日本歌曲や童謡
指揮	横山慎吾 (BS 日テレ・こころの歌に出演中)
ピアノ	金澤麻里子(台東、墨田、葛飾の合唱団で活躍中)

問合わせ 西徳寺 担当 高橋 淳
電話 03-3875-3351

バーベキュー大会が 賑やかに開催されました

先月末に、毎年恒例「青年会主催バーベキュー大会」を開催しました。約百人を超える参加があり、大変盛り上りました。お子様にとっては夏休み最後の行事となり、楽しい思い出になったのではないでしょうか。

尚、集められた会費は義援金として、東日本大震災の被災者の皆様へ、自治体を通して送らせていただいております。ご協力頂きまして誠にありがとうございました。(大橋 伊知郎 記)

掲示板

平成24年 9月

- 1日(土) 午後2時 評議員会定例役員会
8日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
午後6時 同行会「正信偈の教え」聞く
法話 木村主任
11日(火) 午後7時 仏教青年会「歎異抄」聞く
講師 宗 正元師

- 12日(水) 午後1時 婦人会聞法会 本山リーフレットに聞く
「老いを楽しむ」
15日(土) 午後1時半 定例聞法会
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
18日(火) 午後1時半 教行信証「信巻」聞く
講師 宗 正元師
19日(水)～25日(火) 秋季彼岸会
21日(金) 午後1時半 秋季永代経法要
法話 岸本住職 蓮井 邦宗

聞法会だより

◆同行会

西徳寺では月に2回「同行会」を行っております。約35年続いている会ですが、会の始まりはご門徒さんと一緒に、お経の練習をする会として始まりました。

現在は親鸞聖人のお書きになった『正信偈』について、職員が交代で法話をし、皆様とと一緒に学ばせて頂いております。午後6時から始まりますので、仕事帰りや、お近くにお立ち寄りの際には、どうぞご自由にご参加下さい。

◆定例聞法会

「定例聞法会」は約40年続いている聞法会です。当初は『正信偈』についてご講師からお話を聞きしていました。

この会は、毎月第3土曜の午後1時半より行っております。

内容としては、住職からお念佛の話や、ご門徒さんから出た仏教に関わる素朴な疑問等についてお話を頂戴しております。どのような方でもご参加して頂けますので、お気軽にお越し下さい。

◆仏教青年会

「仏教青年会」は、約30年続いている会です。月に一度、第4火曜日の夜7時から行っています。聞法会やレクリエーション、研修旅行等、色々な行事を行っております。どなたでも参加できますので、興味のある方は是非ご参加下さい。

編集後記

昨年の9月に『えこお』が再刊されて1年の月日が経ちました。住職を筆頭に職員一同、試行錯誤を繰り返し編集に携わってきました。その間、ご門徒の皆様から様々な意見が寄せられ、新しいコラムも連載されてきました。

2年目を迎える『えこお』ですが、これからもより多くの皆様からのご指摘をいただき、内容の充実に向けて努力して参りたいと思っております。ご意見・ご感想をお気軽にお聞かせ下さい。
(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：<http://saitokuji.tobiiryo.jp/>

秋季永代経法要のご案内

「お彼岸は『聞法の週間』です」と言われた人がいました。私たちは、「お彼岸」と聞けば、反射的に「墓参り」だと思います。

それでは「墓参り」とはどういう事でしょうか。ご先祖さまに、お参りすることでしょうか。どうしてお参りするのでしょうか。あれして欲しい、これして欲しいと、ご先祖さまにお願いするのでしょうか。それともご先祖さまを、慰めたりいたわるためにお参りするのでしょうか。おそらくは、多くの人が墓前に額ずき、今の自分を振り返るのではないしょうか。今ここに在る自分と、その背景とに出会っているのです。

仏道を学ぶとは自己を学ぶこと、と言われます。自己と自己の成り立つ環境を教えて下さるのが仏道なのです。また「経教（おしえ）は鏡の如し」とも言われ、私自身には見えていなかった私の生きる姿を映し出し、教えてくれます。自分が思っている以上に、大事な自分を、にも拘らずいい加減に生きている自分の姿を。

「墓参り」が仏法に触れる機会となり、自分に頂いた「いのち」と向き合い、自分の在り様を考えることになれば、お彼岸は、まさしく『聞法の週間』になるのではないでしょうか。

日 時 平成24年9月22日(土)
午後1時半より

場 所 西徳寺 本堂

法 話 岸本住職 蓮井邦宗



訂正とお詫び

『えこお』九月号に掲載しました「秋季永代経法要のご案内」(六頁)の日時記載が間違つております。訂正してお詫び致します。

(正) 九月二十一日(金) 午後一時半より

(誤) 九月二十二日(土) 午後二時より

お間違いのないようにお気を付け下さい。大勢の
ご参詣をお待ちしております。